本能寺蔵『落葉百韻』訳注（一）
付・『落葉百韻』翻刻及び解説（『落葉百韻』について）

伊藤伸江・奥田　勲

京都の古刹本能寺には、某年十月二十五日に張行された賦何人百韻（『落葉百韻』）の巻子本が蔵されている。この百韻は、本能寺の第四世日明上人が、心敬を宗匠に迎えて、心敬のみならず歌人正徹とも関係の深い、清水寺、東福寺の僧や畠山氏の被官である武士たちを連衆として行なった連歌であり、その資料的価値の高さから『連歌貴重文献集成　第四集』（昭和五五・勉誠社）に複製が収められたものである。伊藤と奥田は、在京時の心敬の連歌作品の研究をすすめるにあたり、『落葉百韻』の表現の分析が必須であると判断し、この百韻の注釈作業を共同で行ない、発表をなすこととした。それゆえ、この訳注及び翻刻・解説は、科研費基盤研究C「心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究」（研究代表者伊藤、研究分担者奥田）の成果である。注釈等の執筆に関しては、伊藤が下原稿を作成し、奥田とのメール会議及び複数回の対面会議で意見交換、討議を行ない、その結果を完成原稿にまとめた。

凡例

一、底本は本能寺蔵某年十月二十五日賦何人百韻（『落葉百韻』）である。該本は孤本であるため対校本はない。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は百韻の翻

刻に示してあり、適宜参照されたい。原文の表記の誤りと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、語釈にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献に依る。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

一、各句には、**[式目]** **[作者]** **[語釈]** **[現代語訳]** の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮し **[現代語訳]** の他に **[付合]** **[一句立]** の項目を設けた。さらに必要な場合には **[考察]** **[補説]** **[他出文献]** の項目も設けた。

※本訳注（一）の引用文献典拠一覧及び参考文献は、同時に刊行される『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集（日本文化編）第十一号（通巻一号）』掲載の「本能寺蔵『落葉百韻』訳注（二）」の末尾に掲載する。参照を願うものである。

[注釈]

（初折　表　一）

一　木の本能寺井にたまる落葉哉

[式目] 冬（落葉）　水辺・体（井）　植物（木）　落葉只一、松落葉一（一座三句物）　賦物「落人」（野坂本賦物集）。

[作者] 句上に「一條大閤　御一句」とあり、作者は一条兼良。百韻の複製を載せる『連歌貴重文献集成 第四集』に

おける『落葉百韻』の解説（金子金治郎氏）は、「表紙の左側、ラベルの上に当たって、一条大閤代の文字がよめる。～これは、巻末の句揚に、「一條大閤御一句」と示す兼良の発句に関するもので、木の本能寺井にたまる落葉哉の発句が、代作であることを示している。ラベルの蔭か、左側に代作者名を記しているのであろうが、今は読めない。」と述べ、「表紙に記す程であるから、代作者は宗門中の高位の勘能、日与上人あたりかもしれない」と推定し、代作（代作者は不明）とされている。さらに金子氏は、「この懐紙（稿者注　現存巻子本に仕立てた際に落葉百韻が写された懐紙）と、前述の表紙及び見返の間には、古色の点で相違がある。表紙及び見返などの外装は、原巻子本のものを用いたのであろう。」と述べる。外装の「一条太閤代」の文字等については、今後さらなる考究の余地があろうが、今は懐紙の句上に従い、兼良の発句として取り扱う。

一条兼良は、応永九年（一四〇二）生、永享四年（一四三二）摂政・氏長者、文安三年（一四四六）太政大臣、文安四年（一四四七）関白、享徳三年（一四五三）准三宮となり、文明五年（一四七三）に出家、文明十三年（一四八一）八十歳で没。学才豊かで、伊勢物語、源氏物語の注釈などの古典学、有職故実、和歌、連歌の著作を数多く残した。和歌を冷泉持為に学び、正徹にも近しかった。

［語釈］●木の本の　「本の」とそれに続く「寺」の部分に「本能寺」を詠み入れている。掛詞にするために無理な表現をしており、類例は管見に入らない。「木の本」という語句は、桜の木の下に庵を結ぶ出家者を表現した「このもとをすみかとすればおのづからはなみる人となりぬべきかな」（詞花集・雑上・二七六・花山院）や、西行の「このもとの花にこよひはうづもれてあかぬこずゑをおもひあかさん」（山家集・落花・一二四）等によって、桜の木の下を表す春の表現として多く詠まれてきた。落葉を詠む和歌は「わび人のわきてたちよるこの本はたのむかげなくもみぢちりけり」（古今集・秋下・二九二・僧正遍昭）などわずかだが、「木本につもるとみるや山風のふかぬ絶間の落葉なるらん」（続草庵集・落葉・二七〇）「木のもとの落葉がうへに音信れて昨日の秋をとふしぐれかな」（正徹千首・初冬・五〇〇）のように、頓阿や正徹には豊富に作例が見られる。●寺井　寺の境内にわく清水、または井戸をいう。連歌

の作例としては、「くみなる、寺井の水のあさごとに／こほりをくだく霜のふる道」（小鴨千句第八百韻・五七／五八・心恵（敬）／専順）がある。●たまる　和歌の表現で、「たまる」ものは多くは露、霰などで、落ち葉についていうのは『為尹千首』（「一とほりたまる木の葉にしられけりかきねやこえぬ嵐なるらん」）以後か。●落葉　心敬歌「影清き寺井の水にかた枝さす桐のわか葉の風ぞ涼しき」の自注に「井梧とて井の辺にうふる木なればなり」（芝草句内岩橋下）とあるのを勘案すれば桐の落ち葉か。鎌倉中期成立の『和漢兼作集』に「籬菊紫残秋色冷　井梧紅脆雨声余」（秋下・山寺即事・八二八・土御門内大臣）、井戸に桐の葉の落ちる情景として「衰桐稿葉落寒井　老菊晩花護故籬」（冬上・初冬即時・九六六・円明寺前関白左大臣）と見られるが、和歌では、桐の若葉が涼しく茂る井戸の景は心敬の作例が早く、連歌に「むす苔深し山の井の水／涼しさは桐の若葉の木のもとに」（壁草・夏・三九一／三九二）があり、『壁草』（有注本）では「梧は井のもとにうふる木也。この井は桐のわかばと付るに候也。」と注している。『連珠合璧集』にも「桐トアラバ、おち葉、井」。肖柏も草庵の井戸の辺に桐を植え、葉の広がりに涼を得ており（『春夢草』二〇七七詞書）、和歌における井戸端の桐の落葉の作例の登場は「くむ人もみえぬ板井の水のうへに桐の葉おつる秋はきにけり」（称名院集・秋・幽棲秋来・四九七）と遅いものの、井戸と桐との近しさはこの句の鑑賞に利する。

［現代語訳］　ここ本能寺では、木の下の寺の井戸に、落葉がたまっていることよ。

［考察］一条兼良は、当代の文化人として知られ、『新続古今集』の両序のみならず『草根集』、『竹林抄』などの家集、句集の序文を草し、連歌論書『連歌初学抄』、寄合書『連珠合璧集』も著す等和歌・連歌の碩学である。連歌では、主なところでは宝徳三年（一四五一）に『三代集作者百韻』（自邸で興行）、『以呂波百韻』に参加、文明二年（一四七〇）には伊勢国司北畠教具主催の『北畠家連歌合』に判を加えており、また『新撰菟玖波集』には二四句（内発句六句）入集している。

彼の連歌作品は奇抜な秀句仕立てが特色となっている。例えば発句「瓶に挿せ劫を尽くさむ春の花」（新撰菟玖波集・発句上・三六五三）は、「年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし」（古今集・春上・五二・

藤原良房）を念頭に置きながら「劫」と「甲」、「瓶」と「亀」、「亀甲」の縁をつくっている。また、「誘ひてはいざ桜とや夕嵐」（新撰菟玖波集・発句上・三六六三）は「いざさくら我もちりなむひとさかりありなば人にうきめ見えなむ」（古今集・春下・七七・承均）を踏まえ、「夕」に「言ふ」を掛ける。「本能」を「本の」と読みかえる、当該句までの自由さは他に管見に入らないが、彼の句に存する秀句への強い執着を見ると、この発句の掛詞の用法もうなづけるものがある。なお彼の和歌に関しても、掛詞の修辞や字余りが多い語戯性の強い異色な和歌であるとの考察がある（伊藤敬『室町時代和歌史論』）。

【補説】『雍州府志』巻八古跡門上の「柳の水」の項に「西洞院三条南に在り、元内府織田信雄公之宅の井也」（原漢文を読み下す）とし、「一説に柳の水は元本能寺之旧地、今茶屋中島氏之宅地に在り、然れども今其の井無し」とあるのはこの発句と関連あるか。なお、西洞院三条の辺に、柳水、本能寺の町名が現存する。

（初折　表　二）木の本能寺井にたまる落葉哉

二　ふりぬる庭にさゆる松風　　日明

【式目】冬（さゆる）　居所・用（庭）　庭只一、庭の教など云て一（一座二句物）　松風只一、春の風一（吹物、一座二句物）

【作者】日明。本能寺四世。康正二年（一四五六）に本能寺貫主となる。本百韻にも出座している日与（隆蓮）と共に『本妙寺本能寺両寺法度』などを定め、門流の組織化に尽力した。文明六年（一四七四）九月十一日没。本百韻では脇と挙句など五句を詠む。

【語釈】●ふりぬる庭「古りぬる宿」の表現は和歌に多いが、「庭」と結んだ例は多くない。「苔ながらふりぬる庭の小萩原朝露かけて誰にみせまし」（草根集・朝萩・一四四・応永二十六年一夜百首）が少ない例の一つ。●さゆる松風　身にしみる冷たい松風。「薄こほるうへには雪のふりためて／あられの音もさゆる松風」（看聞日記紙背応永二十六

年三月二十九日山何百韻・七／八・庭田重有／田向長資）等の用例がある。

［付合］発句の、本能寺の井戸に散りたまる落ち葉の景を受けて、葉を散らす冷たい風の吹く古びた庭を描写している。裸木の立つ冬の庭で、緑をわずかに残す松の間を、寒風が吹き過ぎていく。ここまでは実景であろうし、脇の役目から本能寺の庭の枯れさびた風情をめでていることになる。「ふりぬる」の「ふり」に落ち葉が「降る」を掛ける。

［一句立］古びた庭には、冷え冷えとした松風が吹いている。

［現代語訳］（前句　ここ本能寺の木の下の井戸には落葉がたまっていることだ。）そして、木の葉が降り落ちる古びた庭には、冷え冷えとした松風が吹いている。

（初折　表　三）ふりぬる庭にさゆる松風

三　都まで今朝は時雨るる冬のきて　　心敬

［式目］冬（冬のきて）　今朝只一、けさと云て一（一座二句物）　都只一、名所一此内に有べし、旅一（一座三句物）　時雨るる（降物）

［作者］心敬。応永十三年（一四〇六）～文明七年（一四七五）。『落葉百韻』の張行時期は、日明上人が本能寺貫首となる康正二年（一四五六）以後、寛正六年（一四六五）までの時期と推定されるが、例えば長禄四年（一四六〇、十二月二一日に寛正元年に改元）には五五歳である。宗匠として十六句出詠。

［語釈］●都まで　都までも。心敬は和歌で「都まで関の東のたび衣空にやつさでかすむ春かな」（心敬集・一〇一・関路早春）と詠み、また『心敬僧都十体和歌』には「都まで袖よしぐれよ夕日影もみぢこきいれてかへるさのやま」（山路紅葉・一六六・麗体）がある。連歌でも「春ともしらじ寒き山陰／都まで薪に残る雪を見て」（吾妻辺云捨・五九／六〇）。この句には「時雨るる」と「きて」の二つの動詞が含まれる。「都まで」がどちらにかかるかによって解

釈は変わってくる。前者なら、時雨が山や野などの地域ばかりでなく、都という空間にさえ及んでいることになり、後者なら、冬が都にやってきたということになろう。「まで」の語義の決定は容易でない場合がある。●今朝は時雨る　和歌に「きえかへりつゆもまだひぬそでのうへにけさはしぐるるそらもわりなし」（後拾遺集・恋二・七〇〇・大納言道綱母）等があるが、例が少ない表現。●冬のきて　冬がきて。「冬の始の心ナラバ、冬のきて」（連珠合璧集）。『新古今集』の祝部成茂歌「冬のきて山もあらはに木のはふり残るまつさへ峰にさびしき」に依る。この表現は、藤原光俊により「ふゆのきてしぐるる時ぞ神なびのもりのこの葉もふりはじめける」（続後撰集・冬・四五八）と「時雨」が詠み添えられ、宗尊親王歌壇や、南朝歌壇に享受され、伏見院ら京極派にも注目された。この百韻と同時期では、正広が非常によく使う。『徒然草』一四段に、成茂歌が世評と異なり、秀歌であると評されているが、『徒然草』がこの百韻の文化圏と重なる点から注意してよい。正広も「住吉の松の嵐に冬のきて時雨の声をならべてぞきく」（松下集・初冬時雨・一九一三）のように、好んで時雨と併せて詠み、当該句も同様に時雨を詠んでいる。「秋は暮れぬと時雨降るなり／同じ野の露だにかはる冬のきて」（享徳二年二月四日何人百韻・七〇／七一）、「送り迎ふる山の下庵／秋寒き嵐の末に冬の来て」（新撰菟玖波集・一〇七二／一〇七三・徳大寺実淳）。なお、本百韻第八一句（伝芳）に「春のきて」がある。

【付合】前句の「さゆる松風」に「時雨」を付けた。「時雨トアラバ、松風」（連珠合璧集）。時雨と松風の取り合わせは伝統的な和歌表現だが、根源には「いまは又ちらでもまがふ時雨かなひとりふり行く庭の松風」（新古今集・冬・五八七・源具親）の世界があり、ここでは発句・脇・第三にかけてこの歌を念頭に置いていることになる。「さゆる」は「冬のきてとほ山おろしさえゆけばやくすみがまのけぶりたつみゆ」（新撰和歌六帖・五八六・衣笠家良）のような、寒風の到来。

［一句立］都までも今朝は時雨が降る、そんな寒い冬がやってきて。

［現代語訳］（前句　長い年月がたった庭には身にしみとおる冷たい松風が吹いている。）山ばかりでなく都までも

今朝は時雨が降る、そんな寒い冬がめぐってきて。

（初折　表　四）都まで今朝は時雨るる冬のきて

四　昨日の雲と秋や行くらん　　三位

［式目］ 冬（秋や行くらん）　雲（聳物、可隔三句物）　昨日（一座一句物・可嫌打越物）

［作者］ 半井明茂。応永九年（一四〇二）生、文明十五年（一四八三）七月六日没（八二歳）。初名は茂成で、明茂と改名している。堯孝の『慕風愚吟集』によれば、例えば応永二十八年（一四二一）に、堯孝は彼の家の月次三首歌会にしばしば出席しており、明茂は若年より和歌の学習に熱心で堯孝と親交があり、正徹とも顔を合わせていた。そうした交友関係の縁から、心敬を師匠とするこの百韻にも参加したか。『公卿補任』によれば、宝徳三年（一四五一）従三位、享徳三年（一四五四）正三位、応仁元年（一四六七）には従二位に叙せられ、応仁二年（一四六八）に出家した。前甲斐守明茂朝臣として宝徳二年の『後崇光院仙洞歌合』等に出詠している。この百韻では兼良を除けば最も身分が高く、七句を詠んでいる。

［語釈］ ●昨日の雲と　昨日空にたれこめていた雲のようにあとかたもなく。「昨日の雲」はとらえられないはかないものの象徴。「しぐれにまじるあとの山風／人の身は昨日の雲のはかなくて」（因幡千句第三百韻・四八／四九・紹永／青陽）。「おもひいでよたがかねごとのすゑならむきのふの雲の跡の山かぜ」（新古今集・恋四・一二九四・藤原家隆）を本歌として、心敬は「思ふもむなしかねごとの末」に「契りより昨日の雲は跡みえて」（竹林抄・恋上・七〇七）と付け、それほど消えやすい雲よりもまだあてにならないあの人の言葉と強調している。●秋や行くらん　秋が過ぎて行くのだろうか。「嵐吹嶺の庵りの戸を閉て／見ざりし雲に秋や行らん」（河越千句第五百韻・七／八・道真／満助）。

【付合】「今朝」と「昨日」、「きて」と「行くらん」が相対している。昨日までの秋の気配は、まるで雲がちりぢりになるかのように跡形も無く消え失せ、今朝は都まで冷えるほどの寒さの冬となった様。秋の終わりの昨日の雲は消え、冬のはじめの今朝には、時雨を降らせる寒い冬の雲が新たにたれこめた。

【一句立】昨日の空の雲がはかなく散り失せるように、秋も行き過ぎていくのだろうか。

【現代語訳】(前句　今朝は都までも時雨が降る、そんな寒い冬が到来していて。)昨日まで残っていた秋の気配は、昨日の雲が流れ去り消えて行ったように、なくなってしまったのだろう。

(初折　表　五)昨日の雲と秋や行くらん

五　旅枕見なれし月をしたふ夜に　隆蓮

【式目】秋(月)　旅(旅枕)　夜(夜分)　月只一、恋一、月松などに一(月与月　七句可隔物)

【作者】隆蓮。本能寺六世権大僧都日与。応永三十三年(一四二六)出生、延徳三年(一四九一)没。寛正六年(一四六五)本興寺に入山、文明六年(一四七四)には本能寺に入山して、両山を兼務した。「博学多才」な「両山中興」と称された(『両山歴譜(日唱本)』)人物であった。和歌や連歌をよくし、『新撰菟玖波集』に十二句入集。この百韻の兼良の発句に日与の句のみで九十九句を付けた『法華要文連歌』を詠んでいる。その他『文明九年正月二十二日何船百韻』に宗祇、利在、立承らと参加、延徳二年(一四九〇)閏八月には、本能寺の自坊で、宗祇らと『連歌七人付句判詞』を競作している。

【語釈】●旅枕　旅に出てふだんの床でない寝床に旅寝すること。「ならはずよいづくの月ぞ旅枕／都出ればみしあきもなし」(河越千句第一百韻・五／六・印孝／長敏)。●みなれし月　見慣れた月。このイメージはしばしば詠まれるが、「見なれし月」の言い回しは管見の限りでは、「五十まで見なれし月のかげのみやうきをわすれぬ友となるらん」

（延文百首・月・五四八・法守法親王）の一首しかない。ただ、「都にて見なれしかげはかはらねどしらぬ山路を出づる月かげ」（嘉元百首・旅・一二八四・実覚）がこの句の情景理解に役立とう。連歌においても、「見なれし月」の用例は見あたらないが、「おもひやる宮この月にまくらして／秋のあはれは旅やまさらむ」（表佐千句第八百韻・一七／一八・承世／紹永）が読解の参考になる。●したふ夜に　恋しく思う夜に。この言い回しも同様で、「かたぶけばみるだに月をしたふ夜にあらましかばの人ぞ古にし」（孝範集・独惜月・六七）など和歌でも希少な用語。

［付合］ 秋の終わりの夜の空のさまを、旅泊にて見上げている様にとりなした。

［一句立］ 旅寝して、都で見慣れた月を恋しく思う夜に。

［現代語訳］（前句　昨日の空にあった雲が散りうせたように、秋も又過ぎ去って行くのだろうか。）長い旅を続けてきて、都で見た月の光を恋しく思いつつ、雲なき空にかかる月を見ている旅寝の夜のうちに。

（初折　表　六）旅枕見なれし月をしたふ夜に

六　いづくの空ぞ鴈の鳴く聲　毘親

［式目］ 秋（鴈）　空空だのめなど云ては此外也（一座四句物）　聲（可嫌打越物（音声に響））　鴈（動物）

［作者］ 毘親。『顕伝明名録』には「伊丹左衛門尉」とあり、伊丹の領主摂津氏の一族か（井上宗雄氏推定）。正徹一門及び彼らと親しい歌人たちによる『康正三年九月七日武家歌合』にも心敬、正頼、円秀らと参加しており、尊経閣文庫蔵六冊本『草根集』巻十五の正広の奥書に藤原毘親の名が見え、正広との親しさもわかる。

［語釈］●いづくの空ぞ　どちらの空からなのか。「月きよみ羽うちかはしとぶ雁のこゑ哀なる秋風の空」（拾遺愚草・花月百首・六八四）のように、清明な月の光と、雁の声を秋の景物として組み合わせた歌は多いが、「いづく」と雁の鳴き声と結んだこの言い回しは和歌・連歌に例が少ない。「とほざかる声ばかりして夕ぐれの雲のいづくに雁のなくら

ん」（続拾遺集・暮天聞雁・二六八・亀山院）、「霧にくれては山もしられず／鳴鴈はいづくの空をわたるらん」（紫野千句第九百韻・六／七・禅厳／春松丸）のように、雲や霧に隔てられて姿が見えない様を思わせる。●鴈の鳴く聲　管見では、和歌には「朝霧のよぶかき空に立ちかへり又ややどりを雁の鳴く声」（柏玉集・初雁・七三六）のみ。連歌では「雲ゐのいづく雁の鳴声／深き夜の月は西なる影澄て」（竹林抄・秋・四六三・専順）など。

［付合］前句の「月」に「鴈の声」を付けた。都をなつかしむ思いからも「雁」は呼びおこされる景物である。「雁トアラバ、都」（連珠合璧集）。

［一句立］鴈の鳴く声はどちらの空から聞こえてくるのだろう。

［現代語訳］（前句　都で見慣れた月を旅の空に恋しく思い、都のことを慕わしく感じている夜には、）空のどちらからなのだろうか、雁の鳴く悲しげな声が聞こえてくる。

（初折　表　七）いづくの空ぞ鴈のなく聲

七　夕暮は色づく山もかすかにて　利在

［式目］秋（色づく）　夕暮（一座一句物）　山（山類）　山与山（可隔五句物）

［作者］利在。『宝徳四年千句』『文明九年正月二十二日何船百韻』に出座している。

［語釈］●色づく山　紅葉した秋山の様。「けさきなくかりがねさむみ露ちりていろづく山に秋風ぞふく」（雅有集・三二六・秋）。「色づく山ぞ詠やらるゝ／〈松立てる高嶺の月のくらき夜に」（行助句・一〇六九／一〇七〇）。『連珠合璧集』に「秋の心、色付（梢　野山　あさぢ　草）」とある。なお、山と山は可隔五句物であり、この百韻ではそれに従い初折裏十三句目に「奥山」が詠まれる。●かすかにて　「色づく山も」とあるところから、「鴈のなく聲」がかすかであるばかりか、山の色もかすかにしか見えないと、音と色とを重ねて表現していることになる。「かすかにて」がこの

ように使われた例は他に管見に入らない。「玉まつる野の哀なる色／夕昏は松のともし火幽にて」（行助連歌・二二六一／二二六二）。

【付合】「鴈」に「山」をつけ、「聲」に「色」を対する。『連珠合璧集』で「山トアラバ、嶺とも谷とも山類のよりきたれるを付べし。又植物には松櫻、生類には鳥鹿などよし。詞には、たかき・へだつる・こゆるなど付べし」と指示があり、前句の「鴈」とのつながりがわかる。

【一句立】夕暮れ時には、紅葉に色づいた山も、太陽の光が失われると共にかすかに見えるばかりになっていって。

【現代語訳】（前句　どこの空を雁は鳴き渡っているのだろう。）夕暮れ時には、（どこともわからず聞こえてくる鴈の声がかすかにしか聞こえないだけでなく、）紅葉した山もかすかにしか見えなくなってしまって。

（初折　表　八）夕暮は色づく山もかすかにて

八　霧降る野路の末のはるけさ　円秀

【式目】秋（霧）　霧（聳物・可隔三句物）

【作者】円秀。正徹の友人として『草根集』に頻出する僧。『草根集』（日次本）に、「清水寺平等坊権少僧都円秀」（康正元年正月二十六日条）とある。正徹は享徳から康正、長禄年間にかけて、円秀の月次歌会に定期的に出ていた。『康正三年九月七日武家歌合』に参加。

【語釈】●霧降る野路　霧がたれこめている野中の道。「霧降る」は、正徹、正広、心敬らが「霧降る野辺」「霧降る谷」などといった表現で和歌に使用し、『康正三年九月七日武家歌合』では忠英も詠んでおり、この連歌の連衆にとっては親しみ深い表現であった。連歌にも用例は多い。例えば、「芝生がくれの秋の沢水／夕まぐれ霧ふる月に鳴鳴きて」（文安四年八月十九日賦何人百韻・二／三・心恵（敬）／専順）では、夕暮れ時に霧がたれこめ、夕月がうかぶ様

子を詠む。聳物同士は可隔三句物であるが、四に「雲」があり、規則に適合する。「霧トアラバ、秋霧　うす霧　朝霧　夕霧　夜霧など云へり」（連珠合璧集）。●末のはるけさ　路がはるかに続き、先の方は遠く隔たっていること。「霜をく野べの末のはるけさ／かり残す道はをざゝの枯立て」（飯盛千句第九百韻・一四／一五・快玉／仍景）。

［付合］「色づく」に「霧」、「山」に「野路」をつけた。暗くなってきているのに加え、霧がたれこめてきた、夕暮時の薄暗さを表現した。前句で表現した山の様子に、前方へ続く路を加え、視線が新しい動きをなすようにしている。

［一句立］霧がたれこめている野中の路の先ははるか遠くに続いている。

［現代語訳］（前句　夕暮れ時には、紅葉した山もかすかにしか見えなくて。）　霧がたれこめている野路の先ははるかに遠く続いている。

（初折　裏　一）霧降る野路の末のはるけさ

九　かきくらす雪にや里もかすむらん　有実

［式目］春（かすむ）　雪（降物・一座四句物）　里（居所・体）　居所与居所（可隔三句物）

［作者］有実（未詳）。

［語釈］●かきくらす　空を暗くして降る。「かきくらす雪野にむすぶ草もがな」（芝草句内発句・三九六）。●雪　ここは春の雪。『連歌新式』一座四句物の項には「雪　三用之、此外春雪一似物の雪別段の事也」とある。●かすむらむ　降る雪により視界がさえぎられているからなのか、霞んでいるようである。雪にあたりが霞む歌例は「ながむれば春ならねども霞みけり雪おろふれる遠きのの里」（後鳥羽院御集・冬・六六）。ここは冴え返るごく早春の景。「立ちかへり又きさらぎの空さえてあまぎる雪にかすむ山のは」（新拾遺集・春上・四七・京極為兼）。

［付合］付句は路の先の遠方の光景。路をたどりゆけばはるか先に里があり、遠方ゆえにはっきりとは見えない様

を、雪故に霞んだかとした。見えにくさを「かすむ」と表現することで、この句まで四句続いた秋から、春へと季を転換している。

［一句立］ あたりは降る雪のために暗くなり、その雪で里も霞んでみえているのだろうか。

［現代語訳］（前句　霧がたれこめる野路の先は、はるかに遠く里へと続き、）そのあたりは、空を暗くして降る雪によってなのか、かすんでいるように見えているのだ。

（初折　裏　二）かきくらす雪にや里もかすむらむ

一〇　まだ初春は梅が香もなし　忠英

［式目］ 春（初春）　梅只一、紅梅一、冬木一、青梅一、紅葉一（植物・一座五句物）　はなし上句下句各一　もなし同前（「もなし」は新式今案までは式目に入らないが、『連歌新式追加並新式今案等』で一座二句物となる。）

［作者］ 忠英。「正徹弟子、若州住人、井上能登守」（『顕伝明名録』）とある人物か。畠山氏の被官で、井上統英の父、総英の祖父である忠英と考える説もある（米原正義『戦国武士と文芸の研究』）。この人物とすると、「若州住人」は「能州住人」であり、おそらく文安年間（一四四四～一四四八）に催行された、能登守護畠山氏の一族、畠山義忠（法名賢良）の高野山参詣和歌にもその名が見える（『賢良高野山参詣路次和歌』に正徹、心恵（敬）、正広らと共に出詠）。『康正三年九月七日武家歌合』にも参加。

［語釈］ ●梅が香　『連珠合璧集』に「春の始の心ナラバ、霞そめたる　残雪（雪消て　雪間）初春」、「梅トアラバ、雪」。「はるまだささえてうめがかもなし／かすまずはなにをなにはのあさぼらけ」（基佐集（静嘉堂文庫本）・一九／二〇）。●もなし　専順作『かたはし』は、「はなし」という表現と比較し、より柔らかな耳ざわりを持つ表現であるとして、「もなしと云句は、彼も是もといふ心ならでも、ただ詞の和らぎに、もといふべしと堯孝法印申されき。」と二

条派和歌の知識を学んで述べている。ここは専順の言うやわらぎを与える「もなし」であろう。なお、「もなし」という表現は、とりわけ心敬の句に多く見られ、「否定的表現の様式をとつてゐても、実は虚無ではなく、むしろ積極的に感動の強さを示す手法」（荒木良雄『心敬』）と注目された。他にも、山根清隆氏（『心敬の表現論』）、湯浅清氏（『心敬の研究』）らの論がある。

［付合］ 前句の「雪」に「梅」を付けた。

［一句立］ 春の初めの今はまだ、梅の香りもしない。

［現代語訳］（前句　空を暗くして降る雪によってなのか、里もかすんでいるよう。）かすんで見えてはいても、春の初めの今はまだ、梅の香りもしない。

（初折　裏　三）まだ初春は梅が香もなし

一一　年寒きこずゑの花の咲きやらで　貞興

［式目］ 花（春）

［作者］ 貞興（未詳）。

［語釈］ ●年寒き　年の寒い頃。漢語「歳寒」の訓読から生じた語。「歳寒、然後知松柏之後彫也」（論語・子罕第九）とある表現から、「年さむき松の心もあらはれて花さくいろを見する雪かな」（新勅撰集・山野雪朝・四〇九・九条道家）、「年さむき松の色にぞつかへては二ごころなき人もしられん」（寛正百首・歳暮・七〇・心敬）と、厳寒に耐える松の変わりなさを和歌に詠まれた。ここは梅の情景。松・竹・梅を「歳寒三友」、梅を竹や寒菊と共に「歳寒二友」「歳寒二雅」とする故事から、梅の情景にも用いられる。「年さむき松をばいはじ霜雪の先あらはるるむめの一花」（柏玉集・冬・年内早梅・一二三六）。●花　一句としては桜であるが、付合では、前句から梅の花となる。●咲きや

らで　充分に開かないで。満開とならないで。

［付合］前句の「梅」から「花」をつけ、梅の花がまだ開かない様子を説明した。「年寒き」の時期であるが、前句から、年があらたまって初春になっても寒いことをさすことになる。「はるかにまよふ松のはるかぜ／こえてだにまだ年さむき柴の戸に／雪をいたゞくしづがあはれさ」（葉守千句第十百韻・六四／六五／六六・肖柏／宗般／宗祇）。

［一句立］厳寒の頃は梢の花もまだ充分に咲ききらないで。

［現代語訳］（前句　この初春はまだ梅の香りもしない。）年が明けても寒さの厳しい時期、梢の梅の花は充分に咲ききらないでいて。

（初折　裏　四）年寒きこずゑの花のさきやらで

一二　嵐ふく日は鳥も音せず　伝芳

［式目］雑　嵐（一座一句物・吹物）　鳥只一　春一　水鳥、村鳥等之間一、浮寝鳥、夜鳥等は各別物也（動物・一座四句物）

［作者］伝芳。生没年未詳。後に紹芳と称した。『顕伝明名録』によれば、「正徹門弟」であり、東福寺の禅僧であったらしい。和歌では『康正三年九月七日武家歌合』に出詠しており、連歌では、『文安四年五月二十九日何船百韻』で執筆をつとめた。また自撰句集に、専順と心敬の合点が加えられ、心敬の注も付された『紹芳連歌』がある。

［語釈］●嵐ふく日は　嵐が吹く日には。ここは前句からは、春の強風の日となる。「世は春の霞の衣きる人も嵐ふく日やぬぎにかる（類題本「ぬぎわかる」）らん」（草根集・霞春衣・七五八〇・享徳元年六月十二日詠）。「嵐吹く日」は連歌にも用例が見当たらないが、例歌は、享徳元年（一四五二）六月十二日に、正徹が清水寺平等坊の円秀のもとで月次歌会に列した際の作であり、表現の参考になる。●鳥　『連珠合璧集』に「鳥トアラバ、鳥はもろ〳〵の鳥也。又庭鳥をも鳥といふ。句によりて（かはるべき也）。」と説明される。また「鳥トアラバ、花」。

【付合】前句の「花」に「鳥」を対する。桜の花がなかなか開かない様子に、風が強く鳥もさえずりださない様を並列させて付けた。

【一句立】嵐が吹く日には、鳥も声をたてない。

【現代語訳】（前句　寒い頃には、梢の花も十分には開かない。）嵐が吹く日には鳥もさえずることがない。

（初折　裏　五）嵐ふく日は鳥も音せず

一三　奥山やあふ人さへにまれならむ　承成

【式目】雑　奥山（山類・山与山（可隔五句物））（参考「奥山　一也。又山の奥と有べし。」（『産衣』））　人（人倫）

【作者】承成（未詳）。

【語釈】●奥山や：「おく山の谷のしばはしまれにだにあふ人なしにこひや渡らん」（永享百首・寄橋恋・七八一・一条兼良）と同趣の句。影響下にあるか。↓一四句【付合】。●あふ人さへにまれならむ　ましてや行き会う人までもまれであろう。「さへに」は添加を表し、「加えて～までが」の意。事態、事物をより強調して明示する働きがあり、ここは、鳥が音もしないのに加え、行き会う人までもめったにおらず、ひどく寂しいと、奥山の様を表す。「この頃はいづち行くらん山にすむ山人さへに春をしたひて」（堯孝法印集・山家暮春・一二一）。「まれならん」は、和歌では「うき時としる人さへやまれならんくだり行世の秋の夕暮」（草根集・秋夕・九四八一・康正二年七月七日詠）等で「さへ～まれならむ」と正徹が使っているが、用例に乏しい。

【付合】前句の「嵐」に「（奥）山」を付けた。「嵐トアラバ、山」（連珠合璧集）。

【考察】一一、一二、一三と花もなく、鳥も鳴かず、人もいないと進んでおり、情景の中の事物を捨象する形で句が付けられて行く。花に加え鳥「も」おらず、鳥のみならず人「さへに」まれだと、欠落の状態が激しくなる様を表す

ために、助詞も注意深く選ばれている。

［一句立］奥深い山の中となると、行き会う人までもめったにいないのだろう。

［現代語訳］（前句　嵐が吹く日には鳥の声もまれにしか聞こえない。）そんな奥深い山の中となると、鳥の気配もめったにせず、まして行き会う人などは、ごくまれにしかいないのであろう。

（初折　裏　六）奥山やあふ人さへにまれならむ

一四　うきをたつきに世を捨つる道　立承

［式目］雑・述懐（うき）　世只一浮世々中の間に一、恋世一　前世後世などに一（一座五句物）　捨世、捨身等捨字（可嫌同懐紙物）

［作者］立承。和歌では、能登七尾にて行なわれた、畠山義統・義元父子主催『文明十三年三月十八日歌合』（正徹弟子正広判）に出詠、連歌は『文明九年正月二十二日何船百韻』に宗祇、隆蓮、利在らと参加、畠山義統張行の『文明十五年十一月二日何船百韻』にも出詠している。おそらく畠山氏の被官であろう。

［語釈］●たつき　「たつぎ」とも。『日葡辞書』は「Tatçugui タツギ」と「Tatçuqi タツキ」を項目にあげ、「むしろTatçuqi（たつき）と言う方がまさる」と注する。意味は、あることをするのによい機会。ついで。「説経などして世渡るたつきともせよ」（『徒然草』一八八段）と使用されるように、「たつき」は世を渡る手段などに用いられる語だが、出家の機縁の意の用例は管見に入らない。恋の句に用いられた用例としては、「たつきなき夕べを空にうちわびて／さはりをだにもきかばうからじ」（大永年間何路百韻・二五／二六）等があり、それゆえこの句の「世」は、式目上は只の「世」であるが、恋の世の意味をも背後に響かせており、その縁で「たつき」を用いているのであろう。なお、百韻中には、「世」の用例は、他に名残折表五句目に「世の中」が存するのみである。●世を捨つる　出家する。「世

トアラバ、すつる」「捨身トアラバ、山」（連珠合璧集）。前句の「奥山」から、「世を捨つる」と付けた。述懐は、懐旧・無常も含んで三句まで連続する。

［付合］ 表面上は、「奥山」から「世を捨つる」と付くが、前句の「あふ」に恋の雰囲気がある。「あふときばかりうきこともなし／暁の別れをしたひ待ち暮れて」（紫野千句第二百韻・七〇／七一）、「あふ事まれに成やうき中／同世のいのち計はよしなきに」（看聞日記紙背応永三十二年六月二十五日賦何人連歌・八四／八五・梵祐／綾小路前宰相）等が参考になる。

［一句立］ つらいと思う気持ちをきっかけとして、足を踏み入れる出家への道。

［現代語訳］（前句　奥深い山に入れば、行き会う人さえもまれであろうが、私はつらい恋の山路の奥でひどく迷ってしまっていて、あの人に会えることさえ、もはやまずないのだろう。）そんなつらい思いが先立つあまり、あの人との仲を思い切り、世を捨てて踏み入る出家への道であることよ。

『落葉百韻』翻刻

［初折表］

十月廿五日

賦何人連歌

木の本能寺井
にたまる落葉哉
ふりぬる庭に

さゆる松風　日明
都まて今朝は
時雨丶冬のきて　心敬
昨日のくもと
秋や行らん　三位
旅枕見なれし
月をしたふ夜に　隆蓮

いつくの空そ
鴈のなく聲　毘親
夕暮は色つく
山もかすかにて　利在
きりふる野路の
すゑのはるけさ　円秀

［初折裏］

かきくらす雪にや
里もかすむらむ　有実
またはつ春は
むめかゝもなし　忠英
年寒きこすゑの
花のさきやらて　貞興
あらしふく日は
鳥もをとせす　伝芳
おく山やあふ人
さへにまれならむ承成
うきをたつきに
世をすつる道　立承
あらましにさそはれ
そむる墨の袖　正頼
ゆふへの鐘の
なみたとふ聲　心敬
暁に月のなる
まて猶まちて　利在
たかきぬ〳〵の
秋うらむらむ　隆蓮
むしたにも思ひある
夜に鳴よはり　三位
むくらのやとに
たへてすむ比　円秀
むかしのみたかき
蓬にへたゝりて　伝芳
霜の色そふ
かみのあはれさ　毘親

［二折表（→本来二折裏）］

いにしへを忘れぬ
山のよるの雨　心敬
松ふくかせも
かすみはてけり　立承
散花のにほひを
春のなこりにて　日明
たちわかれゆく
かりの一こゑ　貞興
羽をかはす鳥の
契もある物を　三位
おもひをつけん
まほろしもかな　隆蓮
来ぬ人やこゝろ
つかひにかはるらむ
有実
なくさむ月を
たれかうらむる　毘親
秋の夜の老の
ね覚に時雨して　利在
いのちの露の
いつかこほれん　心敬
狩のこす草葉
はかりの陰なれや伝芳
夏のゝはらの
水のたえ〳〵　立承
あつき日は汗も
袖をやつたふらん忠英
やすきかたなき
そはのかけはし　貞興

[二折裏（→本来二折表）]

櫛のはに風も
音する冬の空　心敬

たなひく雲や
まよひ行らん　日明

夕立の晴ぬる
あとは涼しくて　貞興

ひかけもなつの
山のへの露　有実

氷室もり宮こに
いつる道すから　忠英

とへは名にさへ
たかつなる里　利在

またしらぬ旅に
石見の国もうし　立承

つまこふ袖も
海となりけり　隆蓮

忍ひぬるこゝろの
底はちひろにて　伝芳

なきかかたみの
竹のひとむら　心敬

朝かほはあした
のほとや開にけん三位

うつろひやすき
秋のひのいろ　円秀

ほしかぬる衣は
いかてうちてまし毘親

露もりあかす
草のかり庵　正頼

[三折表]

鳥も居ぬ古畑
山の木はかれて　心敬

雲の枝より
雪そうちゝる　円秀

月さむし桂に
風やしほるらむ　利在

とをき川原を
ふけて行比　伝芳

うからめや妹かり
いそく夜半の空　隆蓮

まつ人なしと
門やさらまし　有実

憑つる花も杉立
みねの庵　心敬

いつかは春に
あふ坂の山　忠英

うくひすも老ぬる
聲はあはれにて　円秀

わか身のうへを
わふるとはしれ　三位

残るさへはかなき
野への草の露　正頼

やとりし月も
むなし明ほの　有実

夢かへるかりねの
床の秋の風　隆蓮

舟にきく夜の
波はすさまし　毘親

[三折裏]

如何なれや縄たく
海士のぬれ衣　利在

恋路もひなの
なかちをそ行　心敬

忍ふ中よそに
しらぬを便にて　忠英

（二行あき）

とにかくになみた
ひまなき夕ま暮　日明

松に風ふき
猿のなく山　心敬

捨身は木かけ
岩かね宿として　毘親

むかふもきよく
水にすむ月　伝芳

秋かけてあしろを
まもる川の瀬に　利在

うす霧しろき
田上の郷　立承

衣手にあさけの
霜やまよふらん　隆蓮

みち行人の
わくる冬の野　円秀

枯てたに草の（ママ）
色もかくろはて　伝芳

こゝろのたねそ
さま〳〵にある　有実

[名残折表]

さらは又うらみも
はてぬ物おもひ　立承

かすむもかなし
しのふ夜の月　心敬

春のきてなにゝ
涙のおちぬらむ　伝芳

身をしる人は
のとかにもなし　毘親

世の中をあすと
憑むはおろかにて心敬

ひかりのかけを
をしみとめはや　有実

暮わたる窓より
をちに飛蛍　隆蓮

秋風ふくと
竹そそよめく　利在

うちなひくその、
柳のちりそめて　三位

かよへは露の
きゆる道の邊　正頼

さを鹿や山の
ふもとを出ぬらむ貞興

田をもるこゑそ
月にきこゆる　毘親

さ夜ふかき湊の
舟に人はねて　心敬

ひとりある身の
あし火たく影　伝芳

［名残折裏］

わつかなる栖を
なとか憑むらむ　円秀
軒の木すゑに
巣をかくる鳥　三位
開花も去年や
わすれぬ山さくら利在
かすみをこゆる
風のしつけさ　伝芳
うちいつる浪に
氷のひまみえて　隆蓮
われてもくたる
朝川の月　忠英
秋をへむ君か
宮木のかす〳〵に心敬
うてなの露の
玉みかく也　日明

一條太閤
御一句

本能寺
日明五　有実七
心敬十四　忠英六
半井
三位七　貞興六
本能寺日与
隆蓮九　伝芳十
毘親八　承成一
利在九　立承六
円秀七　正頼四

『落葉百韻』について

一　『落葉百韻』

『落葉百韻』は、某年十月廿五日に、本能寺第四世日明のもとで、心敬を宗匠に迎え、一条兼良の発句を拝領して張行された連歌である。この百韻は、後人の書写である巻子本仕立ての写本が本能寺に存在する。この巻子本は、『本能寺宝物古器物古文書取調帳』（明治十二年）[注1]の記録には、「発句　紙地　一巻　一条大閣[閣]十月廿五日筆、元和六庚申三月十五日　寄附主日嘉」と記されており、元和六年（一六二〇）に日嘉上人により寄附されたと伝えられてきている。該本は孤本であり、昭和三五年、桃井観城氏の論文「金剛院日與上人について」（『桂林学叢』第一号・昭和三

五・四）によって、はじめて考察がなされている。さらに同氏の監修による『本能寺』（昭和四六・本能寺）に写真が掲載されたことが契機となって、昭和五五年に影印が、収載に際して調査にあたった金子金治郎氏の解説と共に『連歌貴重文献集成 第四集』（昭和五五・勉誠社）に収められ、現在に至っている。百韻の名称に関しては、桃井氏論文で、巻子本が本能寺において「落葉集」と称されていることが述べられており、この名は一条兼良の発句「木の本能寺（もとのてら）井にたまる落葉かな」にちなんだものという（『本能寺』（昭和四六・本能寺））。この名を受け、百韻形式であることから、金子氏が『連歌貴重文献集成 第四集』解説において「落葉百韻」と呼び、以来こう称されている。この百韻に関する書誌的な解説は、別稿『落葉百韻訳注』の該当箇所に記しており、翻刻と共に適宜参照を願うこととして、ここでは、『落葉百韻』をめぐる文化的な状況に目を向けつつ、百韻の検討をしてみたい。

二 『落葉百韻』連衆

『落葉百韻』の連衆は十五人であり、以下に各人の紹介を記す（括弧内には出句数を示す）。

一条兼良（発句のみ） 応永九年（一四〇二）～文明十三年（一四八一）。永享四年（一四三二）摂政・氏長者、文安三年（一四四六）太政大臣、文安四年（一四四七）関白、享徳三年（一四五三）准三宮となり、文明五年（一四七三）に出家。位人臣を極めたのみならず、当代一流の文化人として諸学に通じるとともに、『新続古今集』の両序、『草根集』、『竹林抄』などの家集、句集の序文を草し、連歌論書『連歌初学抄』、寄合書『連珠合璧集』も著す等和歌・連歌の碩学でもあった。

日明（亭主・五句） 生年未詳～文明六年（一四七四）。本能寺四世。康正二年（一四五六）に本能寺貫主となる。日与と共に『本妙寺本能寺両寺法度』などを定め、門流の組織化に尽力した。本百韻では脇と挙句を詠む。日明の連歌等の文学的な事蹟は、この百韻の他には管見に入らない。

心敬（宗匠・一四句）応永三年（一四〇六）～文明七年（一四七五）。京都東山の清水坂南に存した十住心院住侍。権大僧都。十住心院は室町幕府の祈願寺であり、管領畠山氏の氏寺ともいうべき位置にある寺（真言宗）であった。心敬自身は比叡山横川で修行している。和歌を正徹に学んだ冷泉派歌人であり、畠山の一族である能登守護畠山賢良の歌会にしばしば参加。連歌作者としても活躍。応仁の乱以降、晩年は関東に下向し、都には戻らなかった。

三位（半井と句上に注記・七句）半井明茂。応永九年（一四〇二）～文明十五年（一四八三）。宝徳三年（一四五一）従三位、享徳三年（一四五四）正三位、応仁元年（一四六七）には従二位。歌人の堯孝、正徹らが半井家に出入しており、和歌に熱心である。また宗伊の『諸家月次連歌抄』（文明十一年から十三年の諸所の連歌会での記録）を見ると、しばしば宗伊らと同席しており、連歌の好士でもあった。

隆蓮（本能寺日与と句上に注記・九句）注記によれば、本能寺六世日与。日号を名乗る前の名であろう。→**日与**

毘親（八句）伊丹領主摂津氏の一族か。正徹、心敬、正広らと同席。正広と親しい。

利在（九句）『文明九年正月廿二日何船百韻』で、日与、日顕らと同席。

円秀（七句）清水寺平等坊僧。正徹と懇意。

有実（七句）未詳。

忠英（六句）畠山氏の被官、井上氏か。井上統英の父、総英の祖父かとされる。[注2] 能登守護一族畠山賢良の主催する和歌会に出詠。正徹の弟子。

貞興（六句）未詳。

伝芳（一〇句）後に紹芳と改名。正徹門弟、東福寺禅僧。自句に心敬の加点を依頼し、連歌指導を受けている。

承成（一句、執筆）未詳。

立承（六句）畠山氏の被官、能登での畠山義統主催歌合、連歌などに参加。『文明九年正月廿二日何船百韻』で、日与、日顕らと同席。

・**正頼**（四句）享徳、康正年間に正徹、心敬、正広らと和歌、連歌に同席している。正徹周辺の人物、あるいは僧か。

※**日与**　本能寺六世権大僧都日与。応永三十三年（一四二六）出生、延徳三年（一四九一）没。寛正六年（一四六五）本興寺に入山、文明六年（一四七四）には本能寺に入山して、両山を兼務した。「博学多才」な「両山中興」と称された（『両山歴譜（日唱本）』[注3]）人物であった。和歌や連歌をよくし、『新撰菟玖波集』に十二句入集。参加の判明している百韻に、文明九年（一四七七）正月廿二日、杉美作守重道陣所にての何路百韻（日与と日顕参加）、文明十五年（一四八三）三月二日、本能寺にての何路百韻（日与と日顕参加）があり、延徳二年（一四九〇）閏八月には、本能寺の自坊で、同一の前句に肖柏、基佐、宗長、玄清、宗作と自らの六人が付けた付句の優劣を論じ、後に宗祇に加点、注を依頼し、宗祇句も加えた『七人付句判詞』を作らせている。また、『落葉百韻』の兼良の発句を立句として、法華要文連歌を独吟し（年時不明）、延徳二年（一四九〇）には『法華和語記』を著作している。この『法華和語記』は「法華経をテーマとする釈教歌作成の手引書としての性格を強く有する」[注4]とされており、日与においては、信仰と作歌、作句の融合がなされており、それゆえに連歌師を招いての歌会の開催や連歌の張行も盛んになしたであろうことがうかがわれる。

連衆の中には、経歴未詳の者も存在するが、正徹と関係の深い畠山氏の被官の武士たちや僧の集まりとみなしてよいであろう。本能寺住持日明の主催で、何らかの祝言の意を込めて一条兼良の発句を拝受した格式のある会で、畠山氏、正徹に関係の深い心敬が宗匠に招かれ、連歌に心を寄せる隆蓮（日与）も参加を許された会であった。

三　『落葉百韻』成立時期

現存するこの百韻の巻子本には、張行年月日がなく、成立時期に関しては、先行研究で推定がなされている。はやく桃井観城氏によって、文正元年（一四六六）十月廿五日と推定がなされた[注5]。平成十四年に他見不許可の貴重書であっ

た『両山歴譜　日唱本』が『本能寺史料　古記録篇』に収載され、その文正元年の項を見ると、「十月十五日」の記述に続いて

一条太閤兼良公於当寺発句
木ノ本能寺イニタマル落葉哉
脇　フリヌル底ニサユル松風　本能寺第四世日明

と記述がある。それゆえ、桃井氏の推定は『両山歴譜　日唱本』の記述からと思われ、以後の本能寺の出版物もまたこの推定に依っている。[注6] だが、『両山歴譜　日唱本』では、続いて「又円光院坊ニテ宗祇発句　ノボル水アリテヤ氷ル空ノ月」と記されており、この句は、宗祇が文明十八年十二月二十二日の本能寺での連歌のために作った発句であることが、宗祇連歌研究の進展により現在判明している。[注7] このことから、おそらく文正元年の箇所の記述は、その年になされた連歌を載せたというものではなく、前年に本興寺第五世日禎上人が亡くなって日与が第六世となり、日与の事蹟の記述が続いて行く中で、特にとりあげておきたい重要な連歌の発句を書き留めておいたものではないかと思われる。また、『落葉百韻』の中で、心敬が詠んだ「櫛のはに風も音する冬の空」「いにしへを忘れぬ山の夜の雨」の二句が、文正元年四月の成立である『心玉集』に入れられている。[注8] 従って、『落葉百韻』の張行時期は、文正元年の前年の寛正六年十月二十五日が下限となる。

続いて、金子金治郎氏が、『連歌貴重文献集成 第四集』の解説において張行時期の推定をなしており、『法華宗年表』[注9]の以下の事項

康正二年（一四五六）　日明、本能寺貫主となる
寛正五年（一四六四）二月　日隆、入滅
寛正六年（一四六五）二月　日禎、入滅、日与が本興寺貫主となる。

により、宗門の大事を勘案して、百韻興行の下限を「寛正三年（一四六二）まで遡るべきかと思う」と考えられてい

る。さらに、氏は、「上限を康正二年から二、三年下げて長禄二年（一四五八）とすれば、百韻興行の時期は、一四五八～一四六二の五年の間の、いずれかの年となろう」とされる。加えて、長禄四年の一条兼良の法華経講説に対する感状の存在を、百韻の発句を請う機縁と考えられ、それによって長禄四年（改元寛正元年）を「百韻成立の可能性のもっとも濃い年」と、「推測である」と断られながらも、論じられた。氏の言う兼良の感状とは、『本能寺宝物古器物古文書取調帳』に「書状　一通　一条兼良公長禄龍集上章執徐壮月日書、当山日定ニ贈ラル」と記録された書状であり、その内容は左記の通りである。

本能教寺苾蒭日定講説法華要品最以本門之所詮為宗、以末世之弘通
為先、厥利寔莫大焉、其志寧不嘉耶
長禄竜集上章執除壮月　日　　桃叟　朱印

兼良は、本能寺の僧日定の法華経の講説を賞賛しており、この書状の日定は、『両山歴譜』で日与と推定されている。例えば、日唱本では全六冊のうち第一冊に

寛正元年改元庚辰、師七十六
未入院、金剛院ノ時三十一歳ト見タリ
日与上人為一条太閤兼良、講談法華経之内要品、其称
題曰
本能教寺苾蒭日■定本脱爾也講説法華要品最以本門之所證、為
宗以末世弘通、為先厥利、寔莫大焉、其志寧不嘉耶
長禄龍集上章庚四年也■吳名執除辰吳名執除
壮月　日　　桃叟朱印
蓋初日定ト云歟、未審

という記述があり、感状を写し、「日定」の部分、「本岌爾也」と書き添える。「蓋初日定ト云歟、未審」からも日唱が「日定」が「日与」であるという確証がもてなかったことがわかる。日唱本第二冊の長禄三年の項には「本能寺比丘金剛院日定（後改受与）為一条禅閤請、講要品、即桃叟公之称美記（有本能寺）」とあり、日唱本とほぼ同時期に本興寺で記された日心本[注10]には「第六祖日与上人、為本興寺貫首、金剛院ト号ス（始ハ云日定歟、一条兼良公称美ノ書ニ見ヘタリ）」とある。やや確信が持てないながら『両山歴譜』を記述する中で、日定が日与の前名とされていったのであろう。兼良に法華経の講説をするのであるから、日定は本能寺の中でも学識の高い僧であろう。それゆえ、「博学多才兼作文、好和歌」である日与と重なる部分は多く、以後日与と受け取られてきたのも納得できる部分があるが、やはりこれだけからは、日定が日与の前名とは断定はできかね、『法華宗年表』で長禄三年の法華経講説[注11]、同四年の兼良感状と列挙される事項と『落葉百韻』張行の関連もつけにくく思われる。新たな史料の発見がのぞまれるところである。また、日定と名のる日与が、兼良の感状をもらった後に『落葉百韻』に参加したならば、日号を名乗る以前の隆蓮という名で出詠はしないのではなかろうか。

なお、日与は、『落葉百韻』の兼良の発句を立句として、法華要文連歌を詠んでいる[注12]。兼良の句に自句を九十九句つける様から見て、『落葉百韻』と関連が深いと思われるが、その成立年時は不明であり、『落葉百韻』張行時期と関係づけることはできない。

このように見てくるとやはり、史料の少なさから、『落葉百韻』の成立年時を決定するには至らず、成立時期は、日明上人が本能寺貫主となる康正二年（一四五六）以後、寛正六年（一四六五）までの時期と、十年の幅を取っての推定になる。ただ、こうした結論に至るに際しては、『両山歴譜』を活字史料として読み、考究しえたことが大きく、それは故赤田日崇猊下のご決断による『本能寺史料』への『両山歴譜』（日唱本、日心本）の収載に依るものである。寺外の研究者への史料公開が、中世日本の文化史上、法華宗寺院の果たした役割の解明の糸口となるゆえ、『両山歴譜』の収載は実に意義あることであった。

四　『落葉百韻』と本能寺

それでは、この百韻の興行趣旨はどのようなものが考えられるのであろうか。

まず、兼良の発句の存在であるが、前関白（享徳二年（一四五三）に関白を辞している）一条兼良の発句をもらうことは、本能寺にとりおそらくめったにない機会であったことは、この百韻がわざわざ『両山歴譜』に記され、かつ現代に至るまで保存されえていること、また、日与が、兼良の発句を用いて法華要文連歌をつくっていることからもわかろう。さらに、この句「木の本能寺井にたまる落葉哉」には、「本能寺」が詠みこまれている。発句に込められた祝意は、しばしば名称に表現されるものであり、例えば、『文明八年四月二十三日何船百韻』の発句「ことの葉の種や玉さくふかみぐさ」（管領畠山政長作）は、宗祇の草庵「種玉庵」が詠みこまれており、新造した草庵開きの祝いの発句である。こうした例からも、兼良の発句に「本能寺」を入れていることは、当事者にはわかる何らかの本能寺発展のさまが祝われているのではあるまいか。さらに発句には「本能寺」に「井」が詠まれ、本能寺の井戸における冬の情景となっている。発句には眼前の情景をという約束事を鑑みれば、新しい井戸の完成といったような行事を推定できようか。[注13]

ここで、本能寺の所在地に目を向ければ、本能寺は、応永二十二年（一四一五）、高辻油小路と五条坊門（現仏光寺通）の間に日隆が建立した本応寺に始まる。応永二十五年（一四一八）、日隆は妙本寺の月明と争い、本応寺を破却されて河内に移り、応永二十七年（一四二〇）に尼崎に本興寺をひらいた。その後、永享元年（一四二九）に本応寺を再建し、永享五年（一四三三）に信徒如意王丸が寄進した地に移り、名を本能寺と改めた。その所在地は「自六角以南、四条坊門以北、櫛司以東、大宮以西」の方四町の敷地（ただし六角大宮の非人風呂の地は除く）であり、[注14]落葉百韻が張行された時期の本能寺の所在地は、この地と考えられる。（図1「中昔京師地図」（国際日本文化研究センター所蔵）「初本能寺ノ舊地」）

『本能寺文書』によれば、この土地は、西坊城言長が康暦元年（一三七九）に妙峯寺に寄進し、[注15] その後、東岩蔵寺に所有が移ったものを、[注16] 永享五年四月二日に如意王丸という人物が買い取り、[注17] 日隆に寄進したものである。もともとは西坊城家の土地であったため、文安年間には西坊城家と本能寺の間で所有権をめぐる争いが起こり、享徳二年（一四五二）から長禄四年（一四六〇）までは西坊城家に押領され、寛正六年（一四六五）に本能寺に敷地安堵がなされた。文明十八年（一四八六）にも西坊城家との紛争が再発するが、これも本能寺に安堵がなされた。

後に、天文五年（一五三六）の天文法華の乱により、本能寺は京を逃れて堺に移り、天文十一年閏三月十六日以前に帰洛している。その際には、「六角以南、四条坊門以北、櫛司以東、大宮以西の方四町の敷地」である旧領を安堵し、「六角与四条坊門、油小路西洞院中間、方四町」を新たに得た。（図1「本能寺地」）。京都市埋蔵文化財研究所による二〇〇三年の調査で北が六角、西が油小路、東が西洞院、南が四条坊門に囲まれた一町規模に寺が存在したと推定されている。この

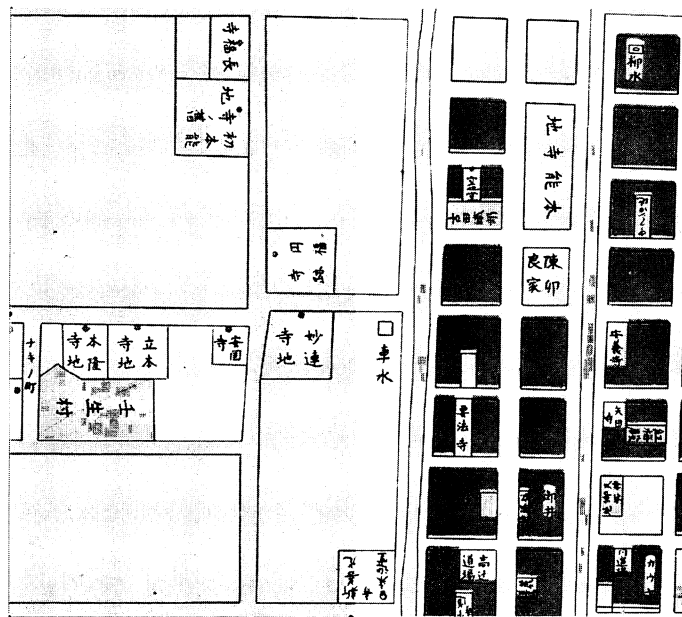

図1　中昔京師地図（部分）
中央を堀川が流れ、右上に柳水が見える。

地に再建された本能寺は、元亀元年（一五七〇）十二月から織田信長の定宿となり、天正十年（一五八二）六月二日の本能寺の変により焼失した。後、天正十七年（一五八九）までに同地に再建されたが、秀吉の寺社移転政策により、天正十八年（一五九〇）に、京極通東、押小路より姉小路に至る南北百四十五間、東西七十間の地に移転し、現在に至る。

さて、以上見てきたように、本能寺の前身本応寺の最初の所在地は、五条坊門西洞院南西頬にあった法華信徒柳酒屋の近傍であり、良質の湧水の存在が考えられる。天文法華の乱後に本能寺が帰洛した「六角与四条坊門、油小路西洞院中間、方四町」の地も、本応寺のあった場所のまっすぐ北方に位置し、後に『雍州府志』が述べるように、柳の水が有名であった。すなわち両寺は北から南へと伏流する水脈の上に位置しており、『落葉百韻』張行時の本能寺もまた近隣に存在する。さらに、『落葉百韻』張行時の本能寺の方四町の敷地「自六角以南、四条坊門以北、櫛司以東、大宮以西」の一角（敷地には含めない）には非人風呂があったことがわかっており[注18]、湧水の存在が想定できる。寺の土地を定める場合に井戸の重要性は論を待たないことからも、本能寺はよい水の湧く名水の井戸を持っていたのであろう。

なお、後に文明十八年（一四八六）十二月二十二日、本能寺円光院での連歌会開催にあたって、宗祇が発句「のぼる水ありてやこほる空の月」を詠み送っている。この句は、「さくら花ちりぬる風のなごりには水なきそらに浪ぞたちける」（古今集・春下・八九・紀貫之）[注19]で有名な「水なき空」の語を使って冬の月の様を詠む「冬の夜の深けてさえたる月影ぞ水なき空の氷なりける」（嘉元百首・冬月・一七五〇・法性寺為信）[注20]の発想から詠まれていよう。宗祇は、水なき空にも「のぼる水」と奇抜な表現を使った句作を「五文字以外左道なりといへども、ありてやと則うけたる所にてゆるさるべきにや」（『実隆公記』）と説明している。こうした発句の表現も、関係者ならよく知る著名な湧き水があった可能性を思わせよう。

五　法華宗寺院における文芸

最後に、法華宗寺院と、『落葉百韻』で宗匠をつとめた心敬、また心敬周辺の歌人、連歌師の関わりを見ておく。心敬その人に関しては、在京時の法華宗寺院での和歌、連歌の記録は、この『落葉百韻』以外は管見に入らないが、彼が応仁元年（一四六七）に東国に下向した際、武蔵国品川での旅宿は、日蓮宗妙満寺の末寺である、太田氏被官鈴木長敏一族ゆかりの品川妙国寺にあったのではないかとされている。[注21]『落葉百韻』では、畠山氏との関係から本能寺に宗匠として招かれたのであろうが、そうしたつながりが、関東下向に際しての、法華宗の有力な檀那の一族の者からの庇護を生んでいったことになろう。なお、永青文庫本『手鑑』中の、心敬の句集の切と推定される一葉では、発句「朝しほは楸風ふく浜辺かな」に「同於妙国寺」と詞書が記されており、[注22]関東の法華宗寺院での連歌参加が思われる。

心敬の和歌の師、正徹は、妙行寺の日宝上人、後には宝舜上人との交流があるほか、妙蓮寺にも訪れている。妙行寺の法華談義は応永末年から著名であったようだが、[注23]長年にわたり上人の坊で正徹も参加して歌会が行なわれ、そこで畠山賢良と同席していた。畠山氏が妙行寺とも交流があり、法華宗寺院の複数と関わっていたことがわかる。以下、『草根集』日次本等の詞書の記述を挙げておく（人名には必要に応じ私に注を付した）。[注24]

永享二年一月五日　年ごとの事にて、妙行寺日宝上人草庵にきたられし
永享六年一月四日　妙行寺（ママ）まかるとて人のありきを見るに
同　五月十二日　妙行寺にて、阿波守（畠山義忠、法名賢良）、大膳大夫入道（赤松性具）など十五首の歌よまれしに、まかりあひて、短冊をたびたりしにかきつけし
宝徳元年七月廿二日　招月庵、妙行寺辺に暫旅所有しに、たづねまかりて（『東野州聞書』[注25]）
宝徳二年二月十八日　妙行寺に修理大夫入道（畠山賢良）などをはせし次とて、続歌ありし
同　三月十五日　妙行寺にて続歌ありし

同　　九月二十五日妙蓮寺といふ所にて続歌ありし
宝徳三年八月十一日　妙行寺日宝上人の坊にて、人々歌よみしに
享徳二年二月廿七日　妙行寺日宝上人の坊にて続歌ありし
享徳三年三月廿七日　妙行寺にて続歌ありし
長禄元年四月八日　妙行寺住持宝舜、修理大夫（畠山賢良）請待ありし次に、一座ありしに
長禄二年四月四日　妙行寺に修理大夫入道（畠山賢良）おはして、続歌ありし
長禄三年三月二十四日妙行寺に修理大夫入道（畠山賢良）おはして、続歌ありし

心敬の後を継ぎ、招月庵を継承した正広になると、本能寺日顕、日与の坊で歌合を行なっているのをはじめ、和歌の才を買われて、多くの法華宗寺院での歌会、歌合に出かけている。以下、『松下集』の詞書の記述を示す。[注26]

文明十三年　同秋ごろ、本能寺の円蔵坊日顕の坊にて三首歌合ありしに
長享二年五月廿九日　本国寺住持日円、堺の末寺成就寺へ下られ侍るに見参し、短冊を出し、一首所望有るに
長享三年三月二日　六条堀川に本国寺といふ法花堂（ママ）行き侍るに、三十首続歌中に
同　　三日　同寺にて続歌ありしにむかし伊豆の海にて、網士の釈迦仏を引きいだし日蓮にいだす、その尺迦彼本国寺にまします、御戸開拝したてまつるに、短冊を出し一首と有るに、いなみがたくてよみ侍る
同　　九日　頂妙寺日祝住持のすすめにて一座ありしに
同　　廿二日　壬生念仏に人人さそはれてまゐり、帰るさに妙蓮寺住持の坊にて一座中に
同　　九月六日　妙蓮寺住持坊にて三首歌合に
同　　廿八日　本能寺住持日与の坊にて三首歌合に
同　　九月尽　頂妙寺住持日祝の坊にて歌合に

延徳二年七月二九日　妙満寺末寺顕本寺とて一乗にあり、其住僧観行房、もとみし福富実増法師と云ふ者の孫なり、いにしへなれにし事などかたり出し侍る次に、一続すすめし中に

延徳三年五月九日　頂妙寺日祝より題目経一部短冊に歌を書きて、追善とておくられしに（注　正徹三十三回忌）

明応二年四月六日　浦上美作守則宗、是も御動座につき、泉州堺正法寺と云ふ寺にありし草庵へ尋ね侍るに、杯の次に一首と所望あるに、任筆はべる

同　九日　美作守則宗正法寺にて一座興行ありし中に

次いで、宗祇となると、百韻その他現存資料により判明する事蹟は多くはないが、本能寺における和歌、連歌それぞれの会に参加している。

文明九年正月廿二日　何船百韻（「杉美作入道もとにて侍し会に」（『宇良葉』[注27]））。発句「風ふかぬ世になまたれそ春の花」（宗祇）。連衆日与、日顕、大内政弘、利在、立承等（天理本その他）。

同十八年十二月廿二日今日於本能寺有連哥、宗祇法師発句遣之「のほる水ありてやこほる空の月」（『実隆公記』）

延徳二年閏八月　本能寺日与坊にて、日与、肖柏、基佐、宗長、玄清、宗作の句を批評、日与に頼まれ、この頃に加点。後に自句を加え「七人付句判詞」に注した（『七人付句判詞』跋文[注28]）

某年　本能寺日誉法印坊にて、同じ心（暁雁）を（『宗祇集』[注29]）

某年　本能寺にて、宗匠わたり給ひし時の会に、旅宿（『宗祇集』）

宗伊においても、宗祇同様、本能寺等で連歌をしていることがわかっており、彼の『諸家月次連歌抄』には、妙蓮寺の日応僧正の名が見える。

文明十二年四月六日　今日、於妙連寺[裏]五条坊門、宮法華堂大有連歌會（『長興宿禰記』[注30]）

文明十五年三月二日　何路百韻（於本能寺）。発句「山かぜに花の音する匂かな」（宗伊）。連衆日与、日顕等（天理本その他）。

こうした交際の様子から、本国寺、妙蓮寺、本能寺のような京都における有力な法華宗寺院において、しばしば歌会、連歌会がもたれ、著名な歌人、連歌師が参集したさまがうかがえる。さらに、応仁の乱前後の京都の法華宗寺院は、公家との関係も急速に深めている。[注31] 例えば、妙蓮寺には庭田重有の子である日応が住持として入寺したが、これによって、妙蓮寺へは、皇族、公家、武家の往来が頻繁となり、談義の聴聞、歌合の開催等の記録が残っている。[注32] また、近衛房嗣・政家父子、花山院政長などが法華宗に入信しはじめ、頂妙寺の住持日祝や、本国寺住持日暁を近衛政家が訪れている。そうした中、本能寺は、文芸に積極的な住持日与の下、武家との関わりも強め、将軍家祈祷所ともなっていった。[注33] 法華宗寺院には、住持たちを中心とし、貴顕や武士らが歌会、連歌会につどう文芸サロンが寺ごとに発達し、本能寺もその一翼を担っていたのであった。

『落葉百韻』は、本能寺の文化史においては、日与の文芸サロンの萌芽が見える時期の催しであり、いわばその揺籃期を告げる催しであった。そして、心敬研究の観点においては、張行場所、連衆から、応仁の乱以前の京都で、心敬がつながりを持った法華宗寺院文化圏の一端が見えてくる、貴重な百韻と言えよう。

注

(注1)藤井学・波多野郁夫編『本能寺史料 古記録編』(平成一四・思文閣出版)。
(注2)米原正義『戦国武士と文芸の研究』(昭和五一・桜楓社)。
(注3)注1に同じ。
(注4)糸久宝賢「本興寺・本能寺両山六世金剛院日与とその周辺」(初出一九八四『大崎学報』、『京都日蓮教団門流史の研究』(一九九〇・平楽寺書店))。
(注5)桃井観城「金剛院日興上人について」(『桂林学叢』第一号・昭和三五・四)。
(注6)桃井氏の見解は、桃井観城監修『本能寺』(昭和四六・本能寺)、藤井学・波多野郁夫監修『法華宗 大本山 本能寺』(二〇〇二・本能寺)にも受け継がれている。また、『法華宗 大本山 本能寺』は、解説で成立の月日を「十月十五日」としており、この点で明らかに『両山歴譜』に依っていることがわかる。

（注7）『実隆公記』文明十八年十二月廿二日条に「宗祇法師来話～又今日於本能寺有連哥、宗祇法師発句遣之、のほる水ありてやこほる空の月」とある。『実隆公記』の引用は『実隆公記 巻一下』（一九七九・続群書類従完成会）により、必要に応じ清濁を付した。

（注8）金子金治郎編『連歌貴重文献集成 第四巻』（昭和五五・勉誠社）金子氏による解説で指摘されている。

（注9）『法華宗年表』（昭和四七・法華宗（本門流）宗務院）。

（注10）注1に同じ。

（注11）『法華宗年表』で長禄三年に「金剛院日与（初日定）関白一条兼良公の為に法華経要品を講ず（両譜）」とあるのは、『両山歴譜』この部分からか。『両山歴譜』日唱本は、手稿本であり、浄書されていないため、たいそう難解だが、『本能寺史料』の翻刻を見ると、この項目に関しては、頭右上におそらく項目の順序を示す「四」の文字があり（「一」は、長禄三年の年号、「二」は同年六月十八日の日登上人遷化の記事、「三」は寛正元年の年号に付されている）、それに従えば寛正元年に入るべき項目となる。

（注12）和歌山市和中文庫に日与の法華要文連歌が所蔵されており、高木豊氏による本文の翻刻がなされている。高木豊「法華要文連歌小考—法華経和歌との関連と対比—」（『浅井円道先生古希記念論文集 日蓮教学の諸問題』（一九九七・平楽寺書店））。

（注13）金子金治郎氏は、『連歌貴重文献集成 第四集』解説において、巻首、巻尾の発句、脇、九十九句目、挙句を検討され「おそらく本能寺の基礎が固まり、さらに発展することを願ったもので、増改築のごとき事業に際しての祈祷連歌であったろう。」と考えられている。

（注14）例えば『日蓮宗宗学全書第二十巻』（昭和三五・日蓮宗宗学全書刊行会）におさめられた『本能寺文書二』に存する「宝徳二年十一月廿八日付畠山持国奉書」には、「六角大宮本能寺敷地六角以南四条坊門以北櫛笥以東大宮以西四町々但除六角面非人風呂敷地」とある。なお、本能寺の敷地に関しては、糸久宝賢『京都日蓮教団門流史の研究』（一九九〇・平楽寺書店）に詳しい。

（注15）『本能寺文書一』所収「康暦元年十二月廿三日付西坊城言長寄進状」に「寄進妙峯寺　六角以南　四条坊門以北　櫛笥以東　大宮以西　方四町敷地事　右敷地永代奉レ寄二当寺道的上人一、且被レ成二勅裁一之上者不レ可レ有二相違一之状、如レ件」と記されている。

（注16）『本能寺文書一』所収「康永十四年正月十八日付因幡堂執行覚勝売券」に「売渡申新定二券文一事　六角以南　四条坊門以北　櫛笥以東　大宮以西　方四町敷地事　右敷地者、依レ有二所用一直銭参拾肆貫文本券文二通相副、限二永代一東岩蔵寺売渡申所也（以下略）」とある。

（注17）『本能寺文書一』所収「永享五年卯月二日付中明院賢鎮売券」に「永代売放申敷地之事　合四町々者　在所京四至境自二六角以南一四条坊門以北　櫛笥以東　大宮以西在レ之　右件敷地者、東岩蔵寺買得相伝之私領也、雖レ然為二一寺興行一如意王丸所望之間、相二副本券文勅裁等三通并仁売券一通一、限二永代一直銭弐佰陸拾貫文所二売渡一実正也（以下略）」とある。

（注18）注14に引用した「宝徳二年十一月廿八日付畠山持国奉書」に記載がある。

(注19)引用は『新編国歌大観』による。
(注20)引用は『新編国歌大観』による。
(注21)金子金治郎『心敬の生活と作品』前編第四章「東国時代」(昭和五七・桜楓社)。
(注22)『細川家永青文庫叢刊別巻　手鑑』(一九八五・汲古書院)内、通し番号二八一の室町時代書写連歌切による。この点に関しては、岩下紀之氏の論がある(「永青文庫本「手鑑」中の連歌作品について」(『愛知淑徳大学論集第十一号』・一九八六・三)。
(注23)中尾堯「近衛政家の日蓮宗信仰」(『豊田武博士古希記念日本中世の政治と文化』(昭和五五・吉川弘文館))。
(注24)『草根集』(日次本)の引用は『私家集大成五』(昭和四九・明治書院)、永享六年分は『永享六年詠草』(『私家集大成七』(昭和五一・明治書院)により、私に清濁を付した。
(注25)『東野州聞書』の引用は、『歌論歌学集成第十二巻』(平成一五・三弥井書店)による。
(注26)『松下集』の引用は『新編国歌大観』による。
(注27)『宇良葉』の引用は貴重古典籍叢刊一二『宗祇句集』(昭和五二・角川書店)による。
(注28)『七人付句判詞』の成立事情は、『中世の文学 連歌論集(二)』(昭和五七・三弥井書店)所収、太田武夫氏蔵本『七人付句判詞』の木藤才蔵氏解説に従う。
(注29)『宗祇集』の引用は『新編国歌大観』による。
(注30)『長興宿禰記』の引用は『史料纂集　古記録篇一一五』(一九九八・続群書類従完成会)による。
(注31)注23に同じ。
(注32)辻善之助『日本仏教史 中世篇之四』(昭和二五・岩波書店)。
(注33)『本能寺文書』に長享元年十二月廿日の日付の足利義尚御教書「天下安全祈祷事、近日殊可抽懇丹之状如件」が存する(『日蓮宗宗学全書第二十巻』(昭和三五・日蓮宗宗学全書刊行会))。

この解説は、立正大学名誉教授中尾堯氏に参加をいただいた研究会議(平成二一年一二月一〇日、於学士会館本館)での討議もふまえたものである。